

先月までの為替相場のレビューと、
今後の注目の経済指標やイベントを元に、為替相場の展望をお届けします。

2015/11/02

欧米の金融政策に対する思惑

通貨ペア	基調		ページ数
ユーロ/円	↓	日銀とECBの金融政策を確認 予想レンジ: 128.500~134.800円	2-3
ユーロ/ドル	↓	材料・チャート・IMMがユーロ安示唆 予想レンジ: 1.07000~1.12500ドル	4-5
ポンド/円	↑	英「スーパーサズデー」に注目 予想レンジ: 181.000~189.500円	6-7
ポンド/ドル	↑	第1週がヤマ場に 予想レンジ: 1.49500 ~ 1.58000 ドル	8-9

※通貨ペアをクリックすると、そのページにジャンプします



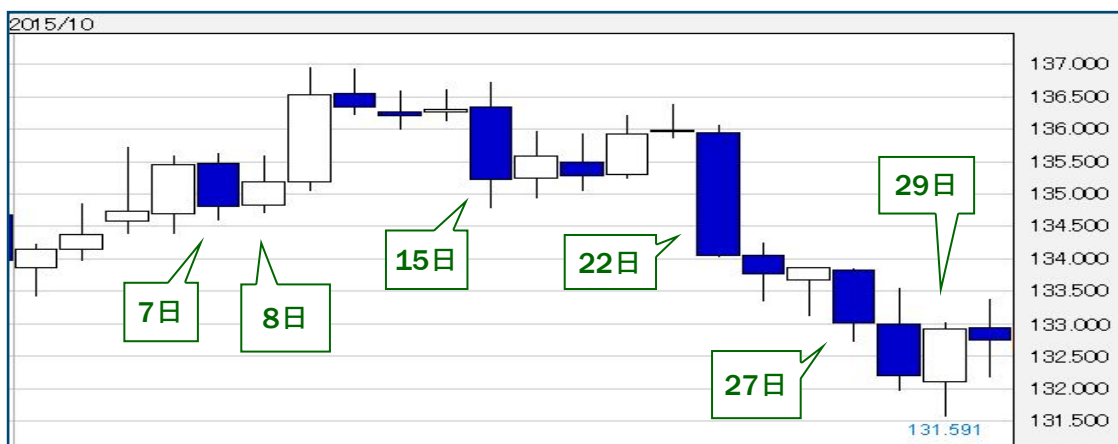
本レポートは、投資判断の参考となる情報の提供を目的としたものであり、投資勧誘を目的として提供するものではありません。投資方針や時期選択等の最終決定はご自身で判断されますようお願いいたします。また、本レポートに記載された意見や予測等は、今後予告なしに変更されることがございます。なお、本レポートにより利用者の皆様に生じたいかなる損害についても、株式会社外為どっとコム総合研究所ならびに株式会社外為どっとコムは一切の責任を負いかねますことをご了承願います。

Copyright©2015 Gaitame.com Research Institute Ltd. All Rights Reserved. www.gaitamesk.com

ユーロ/円 10月の推移

10月のユーロ/円相場は131.591~136.954円のレンジで推移。月間の終値ベースでは約0.9%の下落(ユーロ安・円高)となった。

弱めの米経済指標(雇用統計や小売売上高など)を受けてユーロ/ドルがじり高で推移した事を追い風に値を上げるも、137円ちょうどを前に伸び悩んだ。オーストリア中銀のノボトニー総裁の発言が転機となり、徐々に弱含む中で欧州中銀(ECB)のドラギ総裁が12月理事会での追加緩和の可能性について言及すると急落。本邦の追加金融緩和観測が後退する場面で円が買い戻された事も重石となり、29日に4月以来となる131.591円の安値を付けた。



四本値	
OPEN	133.877
HIGH	136.954
LOW	131.591
CLOSE	132.753

7日	日銀が金融政策の据え置きを発表すると円買いが優勢となり、ユーロ/円は下落。その後、独8月鉱工業生産が前月比-1.2%と予想(+0.2%)外の低下となった事を受けたユーロ売りが入った上、「ビール世界最大手でベルギーのABインベブが同業2位の英SABミラーに対する買収価格を引き上げて正式提案」との報道を受けてユーロ売り・ポンド買いが強まると、ユーロ/円は135円を割り込んだ。
8日	欧州中銀(ECB)理事会議事要旨が公表され、「インフレの下振れリスクが増加したとの認識で一致」「新興国市場の減速でユーロ圏の景気回復は想定より遅い見通し」などが明らかとなった。これを受けてユーロが売られた。予想より強い結果となった米週次新規失業保険申請件数を受けてユーロ/ドルが下落した事も重石となり、ユーロ/円は134.791円まで下落。しかし、その後公表された米FOMC議事録では年内利上げ見通しが後退したと解され、ドル売りが強まってユーロ/ドルが上昇すると、一時135.592円まで反発した。
15日	タカ派と見られていたオーストリア中銀のノボトニー総裁が「インフレ押し上げへ追加措置必要」とハト派的な見解を示した事から、ユーロ/円が下落。その後、米9月消費者物価指数が前年比±0.0%、コア・前年比+1.9%と予想(-0.1%、+1.8%)を上回り、米週次新規失業保険申請件数も25.5万件(予想:27.0万件)となるなどドル買いが強まり、ユーロ/ドルが一段安となった事も重石となり、134.800円まで一段安となった。
22日	ECBが政策金利の据え置き(0.05%)を決定。ドラギECB総裁が会見で「次回12月の理事会で、低インフレに対応するために現行の量的緩和(QE)プログラムを見直す」「現在実施している国債買入れは2016年9月まで継続し、必要ならそれ以降も実施」などの方針を示した。また、ユーロ高によるインフレ低下リスクや中銀預金金利の追加引き下げにも言及した。これらを受けてユーロ売りが強まり、ユーロ/円は134.041円まで急落した。
27日	米軍が南シナ海に駆逐艦を派遣したと報じられると、日経平均が下げ幅を拡大。この中で円買い優勢となり、ユーロ/円は下落。その後は欧米株安・原油安が重石となり、132.733円まで一段安となった。
29日	本邦9月鉱工業生産が前月比+1.0%、前年比-0.9%と予想(-0.6%、-2.6%)を上回った事を受け、日銀の追加緩和観測が後退すると円を買い戻す動きが優勢となり、ユーロ/円は131.591円まで下落。ただ、その後はロンドンフィキシング(25時)に向けたユーロ買いなどを受けて133.030円まで反発した。

巻頭の特記事項を必ずお読みください。

EUR/JPY

日経平均

OPEN	17479.97
HIGH	19202.34
LOW	17389.57
CLOSE	19083.10

独 D A X

OPEN	9757.04
HIGH	10886.98
LOW	9396.34
CLOSE	10850.14

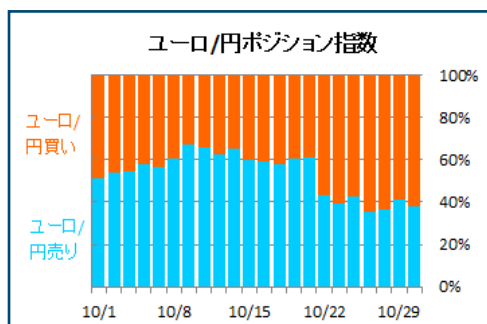
独2年債利回

OPEN	-0.256%
HIGH	-0.239%
LOW	-0.355%
CLOSE	-0.315%

独10年債利回

OPEN	0.590%
HIGH	0.636%
LOW	0.422%
CLOSE	0.517%

10月のポジション動向



11月の注目ポイント

月間指標カレンダー(外部リンク)

- ・10月中国財新製造業PMI(2日)
- ・日銀金融政策決定会合(18~19日)
- ・イエレン米FRB議長議会証言(4日)
- ・米FOMC議事録(18日)
- ・10月米雇用統計(6日)
- ・ECB理事会議事録(19日)
- ・9月ユーロ圏小売売上高(5日)
- ・11月独/ユーロ圏PMI製造業・速報(23日)
- ・10月中国貿易収支(8日)
- ・11月独Ifo景況感指数(24日)
- ・7-9月期ユーロ圏GDP・速報値(13日)
- ・原油相場、主要国株価
- ・7-9月期日GDP・一次速報(16日)
- ・11月独ZEW景気期待指数(17日)

11月の見通し

10月の動きによりユーロ先安観が浮上する一方、日銀の緩和期待の後退により円先安観が後退している。テクニカル面では、一目均衡表を見ると日足では下落を示唆するとされる三役逆転が点灯し、週足では点灯目前となるなど、今月のユーロ/円は下値が意識されやすいと見る。今月予定されているECB理事会議事録を始め、ユーロ圏の要人発言などからECBの12月緩和が意識されるようだと、ユーロ相場の重石となりそうだ。もし先月安値(131.591円)を割ると、130円ちょうどまでは主だった目標値が見当たらない。また、130円でも下げ止まらない場合は、2012年安値(94.100円)~2014年高値(149.760円)の上げ幅38.2%押しに当たる128.498円に向けた一段安もあるだろう。

一方、本邦では日銀金融政策決定会合前に本邦7-9月期国内総生産(GDP)(16日)が発表される。予想より弱い結果となれば日銀の追加緩和観測が再び浮上して円主導で動き出す事も考えられる。(川畑)

(予想レンジ: 128.500~134.800円)

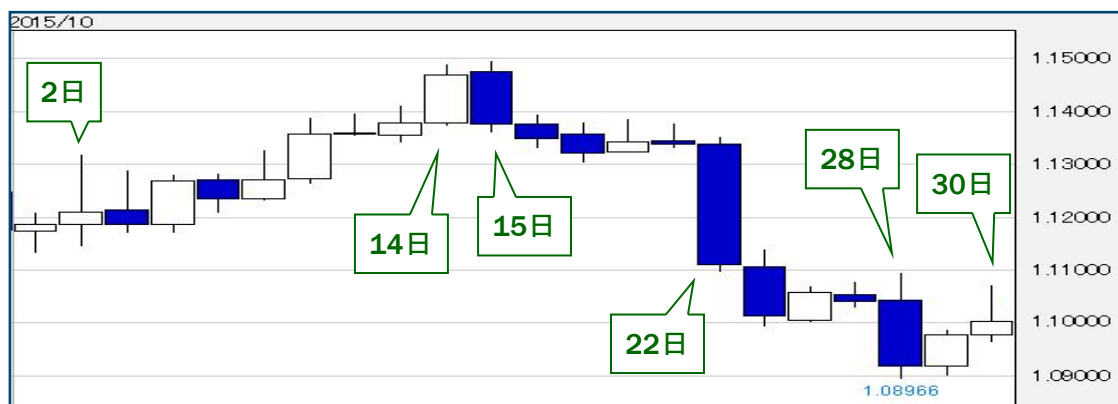
EUR/USD

ユーロ/ドル 10月の推移

10月のユーロ/ドル相場は1.08966～1.14951ドルのレンジで推移。月間の終値ベースでは約1.6%の下落(ユーロ安・ドル高)となった。

序盤は米経済指標(雇用統計や小売売上高など)で弱めの内容が相次いでドル売りが優勢となった事などからじり高で推移するも、15日にオーストリア中銀のノボトニー総裁がハト派的発言をした事をきっかけに反落。その後は22日の欧州中銀(ECB)理事会でのドラギ総裁の発言を受けて12月の追加緩和が意識されてユーロ売りが強まった上、28日の米連邦公開市場委員会(FOMC)で12月利上げの可能性が浮上してドル買いが強まると、8月以来の安値となる1.08966ドルまで急落した。

なお、4日のポルトガル選挙では 単独で過半数議席を占める事は出来なかったが連立与党が勝利したため、ユーロ相場への影響は限られた。



四本値	
OPEN	1.11744
HIGH	1.14951
LOW	1.08966
CLOSE	1.10030

2日	米9月雇用統計は、失業率こそ横ばいの5.1%となったものの、非農業部門雇用者数が14.2万件増と予想(20.1万人)を下回り、労働参加率は62.4%と前月(62.6%)から低下するなど、弱い内容であった。これを受けてドル売りが強まり、ユーロ/ドルは1.13182ドルまで上昇。しかしその後、米雇用統計の結果を受けて年内の米利上げ観測が後退する中、NYダウ平均が反発して米長期金利が上昇した事から、上げ幅を縮小した。
14日	米9月小売売上高は前月比+0.1%、自動車を除いた数値も同-0.3%と、予想(予想:+0.2%、-0.1%)よりも弱い結果となった。また、同時発表の米9月生産者物価指数も前年比-1.1%と予想(-0.8%)以上の低下となった。これらを受けて米長期金利が一時的に2%を割り込むと同時にドル売りが強まり、ユーロ/ドルが上昇。その後公表された米地区連銀経済報告(ベージュブック)が年内利上げ期待を高める内容でなかった事が明らかとなると、1.14888ドルまで一段高となった。
15日	タカ派と見られていたオーストリア中銀のノボトニー総裁が「インフレ押し上げへ追加措置必要」とハト派的な見解を示した事を受け、ユーロ/ドルが下落。その後、米9月消費者物価指数が前年比±0.0%、コア・前年比+1.9%と予想(-0.1%、+1.8%)を上回り、米週次新規失業保険申請件数も25.5万件(予想:27.0万件)となるなどドル買いが強まると、1.13629ドルまで一段安となった。
22日	ドラギECB総裁が「次回12月の理事会で、低インフレに対応するために現行の量的緩和(QE)プログラムを見直す」「現在実施している国債買い入れは2016年9月まで継続し、必要ならそれ以降も実施」などの方針を示した。また、ユーロ高によるインフレ低下リスクや中銀預金金利の追加引き下げにも言及した。これらを受けてユーロ売りが強まった。ほぼ同時刻に発表された米週次新規失業保険申請件数が25.9万件と予想(26.5万件)より強い結果となり、ドルが買われた事も、ユーロ/ドル相場の急落に拍車をかけた。
28日	米FOMC声明で「次回会合でフェデラルファンド(FF)金利の誘導目標の引き上げが適切かどうかを判断するに当たり、委員会は完全雇用および2%のインフレ目標に向けた進展について、実績と予想の両方を評価」と12月の会合での利上げの可能性について言及し、「経済活動および労働市場の見通しをめぐりリスクはほぼ均衡していると引き続き見ている」として米経済は緩やかなペースで拡大していると指摘した一方、9月の声明にあった世界経済を巡るリスクが米経済に与える潜在的な影響については言及しなかった。市場ではタカ派的な声明と受け止められて米長期金利が上昇すると共にドル買いが強まり、ユーロ/ドルは1.08966ドルまで急落した。
30日	ユーロ圏10月消費者物価指数・速報値は事前予想通り前年比±0.0%であったため、ユーロ/ドル相場の反応は限定的であった。

巻頭の特記事項を必ずお読みください。

EUR/USD

NYダウ平均

OPEN	16278.62
HIGH	17799.96
LOW	16013.66
CLOSE	17663.54

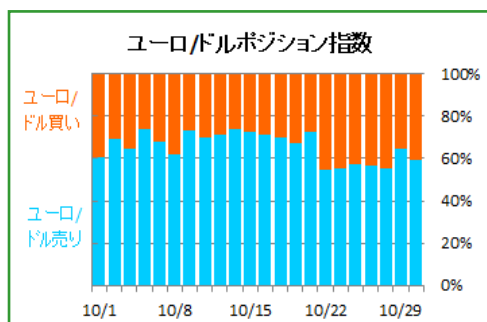
独10年債利回

OPEN	0.590%
HIGH	0.636%
LOW	0.422%
CLOSE	0.517%

米10年債利回

OPEN	2.0385%
HIGH	2.1816%
LOW	1.9022%
CLOSE	2.1421%

10月のポジション動向



11月の注目ポイント

月間指標カレンダー(外部リンク)

- ・10月中国財新製造業PMI(2日)
- ・9月ユーロ圏小売売上高(5日)
- ・10月米雇用統計(6日)
- ・10月中国貿易収支(8日)
- ・7-9月期ユーロ圏GDP・速報値(13日)
- ・10月米小売売上高(13日)
- ・11月独ZEW景気期待指数(17日)
- ・10月米消費者物価指数(17日)
- ・米FOMC議事録(18日)
- ・ECB理事会議事録(19日)
- ・11月独/ユーロ圏PMI製造業・速報(23日)
- ・11月独Ifo景況感指数(24日)
- ・11月独消費者物価指数・速報値(30日)
- ・原油相場、主要国株価

11月の見通し

11月はユーロ圏、米国共に金融政策発表が予定されていないため、ユーロ/ドル相場は12月に発表される金融政策に対する思惑が相場を動かしそうだ。もっとも、先月の流れを考慮するとユーロ売り・ドル買いの材料に反応しやすい地合いが継続している可能性が高いだろう。今月予定されている米FOMC議事録やECB理事会議事録を始め、各種経済指標や要人発言などから米国の利上げとユーロ圏の追加緩和を意識させる経済指標の結果や要人発言などが出るようだと、ユーロ/ドル相場に一段の下落圧力が掛かりそうだ。

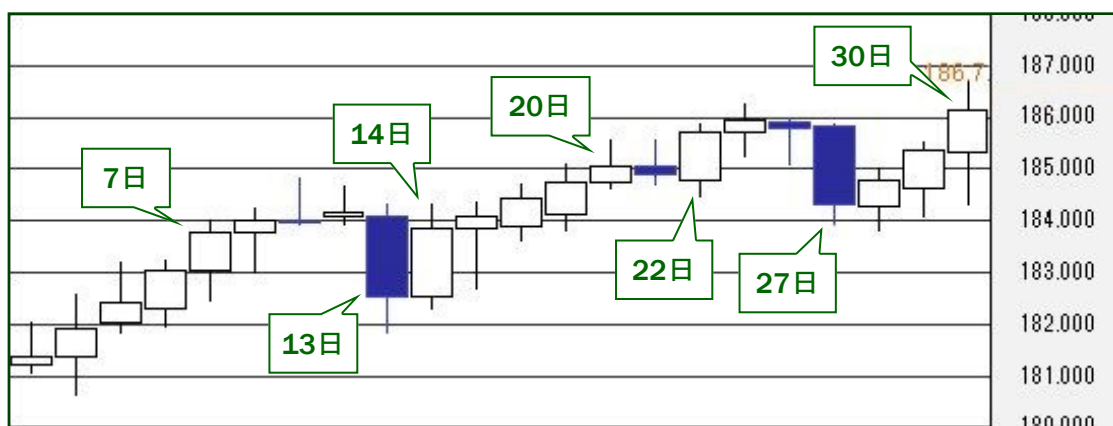
テクニカル面では、先月は足元で下押し目処として機能していた1.11ドル付近を割ると1.08966ドルまで一段と下落した。その後の戻りは1.11ドルちょうどを前に伸び悩むなど、上値も重い。もし前月安値(1.08966ドル)を更新するようだと、5月や7月の下押し局面でサポートとして機能してきた1.08ドルちょうど割れを試す機運が高まりそうだ。もし割ってしまうと3月安値(1.04623ドル)まで主立った目処が見当たらないため、1.07ドルちょうどといった心理的節目を目処としながら下値を試す事となるだろう。仮に上伸したとしても、今月は1.12ドル台半ばに広がる週足の一目均衡表の雲の下限が抵抗となりそうだ。

シカゴIMMのユーロポジションを見ると、10月30日発表分は105,934枚と前週比で4万枚を超えるショート増加を記録した。材料・テクニカル・投機筋のポジションがユーロ下落を示す中、売り一服によるショートカバーが出る場面があれば戻り売りの好機となるだろう。(川畑)

(予想レンジ: 1.07000~1.12500ドル)

ポンド/円 10月の推移

10月のポンド/円相場は180.663~186.723円のレンジで推移。月間の終値ベースでは約2.7%の上昇(ポンド高・円安)となった。13日と27日に比較的大きな陰線を日足チャート上に付けた以外は、陽線引けが目立っており、ほぼひと月を通して堅調であった。8月のチャイナ・ショックの後遺症が薄れる中、英国の利上げ観測が改めて意識される事になったと見られ、ポンド高・円安が進んだ。なお、30日(10月最終営業日)のロンドンフィキシング前後では大規模なポンド買いのフローが持ち込まれたとの観測もあった。



四本値	
OPEN	181.225
HIGH	186.723
LOW	180.663
CLOSE	186.148

7日	日銀が金融政策の現状維持を発表すると、一部に追加緩和の期待があったためか182.50円前後まで弱含むなど円高に振れる場面もあったが、英8月鉱工業生産が前月比+1.0%と予想(+0.3%)を大幅に上回るとポンド高が進み一時184.00円台を回復した。
13日	中国9月貿易収支の内訳で輸入が前年同月に比べ大幅に減少していたことから、同国の景気失速懸念が再燃。日経平均が200円を超えて下落する中、リスク回避の円買いが活発化した。さらに、英9月消費者物価指数が前月比、前年比ともに-0.1%と予想(いずれも±0.0%)を下回るとポンド売りが強まった。
14日	英9月失業保険申請件数が前月比+0.46万件、英6-8月週平均賃金が前年比+3.0%と、予想(-2.2万件、+3.1%)より弱かったことからポンドが売られる場面もあったが、NY市場に入るとドル売りが活発化したため大幅高となった。なお、米9月小売売上高(前月比+0.1%)、米9月生産者物価指数(前月比-0.5%)といずれも予想(+0.2%、-0.2%)を下回った上に、米地区連銀経済報告(ページブック)で「ドル高が製造業と観光業に打撃を与えている」としてドル高への警戒感が示されたことから利上げ期待が剥落するとともにドル売りが活発化した。
20日	習近平中国国家主席が24日までの予定で英国を公式訪問。英政府が、習主席の訪英中に300億ポンド以上の貿易・投資案件の合意を見込んでいるとされる中、ポンド買いが優勢となった。
22日	英9月小売売上高が前月比(除自動車・燃料)で+1.7%と予想(+0.4%)を遥かに上回るとポンド買いが強まった。また、欧州中銀(ECB)のドラギ総裁が12月の追加緩和を示唆した事を受けて欧米株価が大きく上昇する中で円安が進んだため、185.80円台まで上昇した。
27日	米海軍の駆逐艦が南シナ海の中国人工島12カイリ内を航行したと報じられた事をきっかけに株安・円高が進んだ。その後、英7-9月期国内総生産(GDP)・速報値が前期比+0.5%、前年比+2.3%と、予想(+0.6%、+2.4%)を下回るとポンド安・円高が加速した。
30日	日銀が金融政策の現状維持を発表した事を受けて円買いが強まると、一時184.30円台まで下落したが、ロンドンフィキシング(日本時間25時)に向けてポンド買い・円売りのフローが持ち込まれたとの観測から、186.723円の高値まで反転上昇した。

巻頭の特記事項を必ずお読みください。

GBP/JPY

日経平均

OPEN	17479.97
HIGH	19202.34
LOW	17389.57
CLOSE	19083.10

FTSE100

OPEN	6061.61
HIGH	6487.89
LOW	6051.62
CLOSE	6361.09

英2年債利回

OPEN	0.567%
HIGH	0.642%
LOW	0.490%
CLOSE	0.626%

英10年債利回

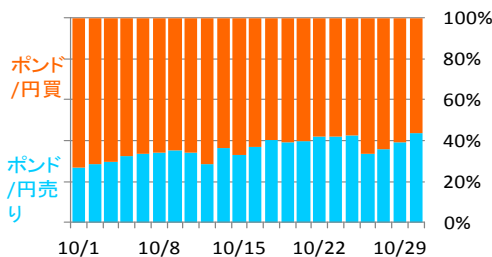
OPEN	1.772%
HIGH	1.946%
LOW	1.645%
CLOSE	1.922%

10月のポジション動向

11月の注目ポイント

月間指標カレンダー(外部リンク)

ポンド/円ポジション指数



- ・10月英製造業PMI(2日)
- ・10月英サービス業PMI(4日)
- ・BOE政策金利発表/議事録(5日)
- ・BOE四半期インフレレポート(5日)
- ・9月英鉱工業生産(6日)
- ・9月英貿易収支(6日)
- ・10月英雇用統計(11日)
- ・7-9月期日本GDP・1次速報値(16日)
- ・10月英生産者物価指数(17日)
- ・10月英消費者物価指数(17日)
- ・日銀金融政策決定会合(18-19日)
- ・10月英小売売上高(19日)
- ・10月日本消費者物価指数(27日)
- ・7-9月期英GDP・改定値(27日)

11月の見通し

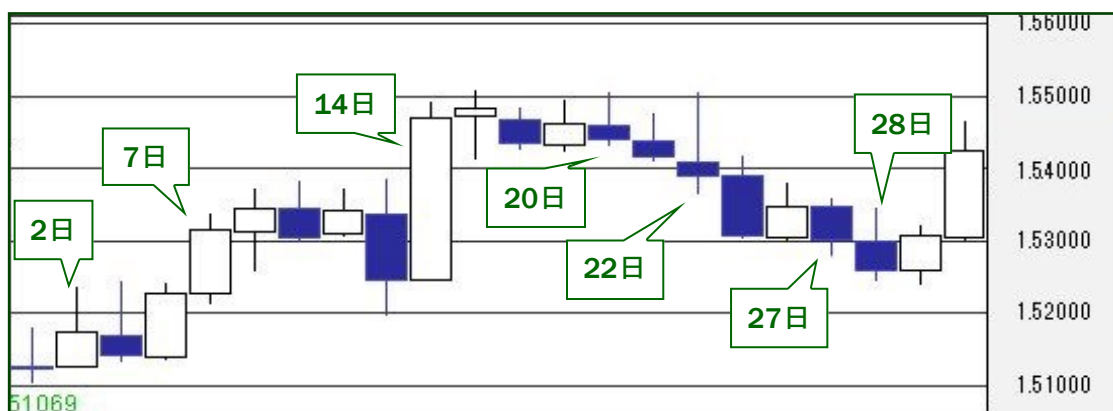
10月のポンド上昇の背景には、11月5日の「スーパーサズデー」を見据えた動きがあったのかもしれない。この日は、英中銀(BOE)が金融政策を発表すると同時に議事録も公表。さらにBOEの経済見通しを四半期ごとに示すインフレレポートも同時に公表するという特別な日となるため「スーパーサズデー」と呼ばれる。今回の「スーパーサズデー」では金融政策そのものは据え置き(政策金利0.50%、資産買入れプログラム3750億ポンド)の公算が大きい。議事録ではこれまで1票(マカファーティ委員)しかなかった利上げ票が、場合によっては3票(ウィール委員とフォーズ委員)に増えるとの見方も一部にある模様だ。インフレレポートも含めて、BOEの利上げに前向きな姿勢が示されればポンド高基調が維持される公算が大きい。ただ、カーニーBOE総裁は、利上げは未確定であり、行うとしてもそのペースは「緩やか」になると慎重な姿勢を崩していない(10月24日の新聞インタビュー)。市場が利上げに前のめりになりすぎると、失望(のポンド売り)が大きくなる可能性がある点には注意が必要だろう。(神田)

(予想レンジ: 181.000~189.500円)

ポンド/ドル 10月の推移

GBP/USD

10月のポンド/ドル相場は1.51069～1.55084ドルのレンジで推移。月間の終値ベースでは2.0%の上昇(ポンド高・ドル安)となった。前半に発表された米経済指標(9月雇用統計、8月貿易収支、9月小売売上高など)が軒並み弱かった事から、米連邦公開市場委員会(FOMC)の利上げ観測が後退する格好でポンド高・ドル安が進んだ。また、習近平中国国家主席の訪英を機に、英国への投資増加期待が膨らんだ事などもポンド高・ドル安に繋がった。米FOMCなどを経て米国の12月利上げ観測が再浮上すると終盤には1.52ドル台へと押し戻される場面もあったが、月内最終日に1.54ドル台を回復するなど底堅さが目立った。



四本値

OPEN	1.51280
HIGH	1.55084
LOW	1.51069
CLOSE	1.54275

2日	英9月PMI建設業が59.9と予想(57.5)を上回るとポンド買いが優勢となった。その後、米9月非農業部門雇用者数の前月比増加幅が14.2万人増にとどまるなど、米9月雇用統計が弱い内容だった事からドル売りが活発化すると1.5230ドル台まで上昇した。
7日	前日の米8月貿易収支が弱かった事などからドルが売られやすい地合いの中、英8月鉱工業生産が前月比+1.0%と予想(+0.3%)を大幅に上回ると1.53ドル台を回復してポンド高・ドル安が進んだ。
14日	英9月失業保険申請件数が前月比+0.46万件、英6-8月週平均賃金が前年比+3.0%と、予想(-2.2万件、+3.1%)より弱かった事からポンドが売られる場面もあったが、NY市場に入るとドル売りが活発化したため大幅高となった。なお、米9月小売売上高(前月比+0.1%)、米9月生産者物価指数(前月比-0.5%)といずれも予想(+0.2%、-0.2%)を下回った上に、米地区連銀経済報告(ページブック)で「ドル高が製造業と観光業に打撃を与えている」としてドル高への警戒感が示された事から利上げ期待が剥落するとともにドル売りが活発化した。
20日	習近平中国国家主席が24日までの予定で英国を公式訪問。英政府が、習主席の訪英中に300億ポンド以上の貿易・投資案件の合意を見込んでいとされる中、一時1.55ドル台までポンドが買われる場面があった。
22日	英9月小売売上高が前月比(除自動車・燃料)で+1.7%と予想(+0.4%)を遥かに上回るとポンド買いが強まった。しかし、1.55ドル台で再び頭打ちとなり、欧州中銀(ECB)のドラギ総裁が12月の追加緩和を示唆するとユーロ安・ドル高に連れてポンド安・ドル高に転換した。
27日	英7-9月期国内総生産(GDP)・速報値が前期比+0.5%、前年比+2.3%と、予想(+0.6%、+2.4%)を下回るとポンド安が進行。米9月耐久財受注(除輸送用機器)や米10月消費者信頼感指数などの米経済指標は予想を下回ったが、NY原油の下落などからドルが堅調に推移する中、1.5280ドル台まで下落した。
28日	米連邦公開市場委員会(FOMC)が声明で「次回会合で利上げが適切かどうか判断する」などとした事から12月利上げ観測が再浮上。米長期金利の上昇とともにドル高が進み1.5240ドル台まで下落した。

GBP/USD

NYダウ平均

OPEN	16278.62
HIGH	17799.96
LOW	16013.66
CLOSE	17663.54

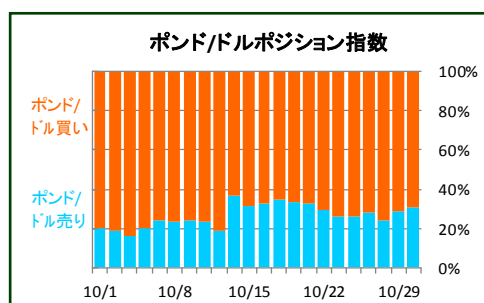
米10年債利回

OPEN	2.0385%
HIGH	2.1816%
LOW	1.9022%
CLOSE	2.1421%

英10年債利回

OPEN	1.772%
HIGH	1.946%
LOW	1.645%
CLOSE	1.922%

10月のポジション動向



11月の注目ポイント

月間指標カレンダー(外部リンク)

- ・10月英製造業PMI(2日)
- ・10月米ISM製造業景況指数(2日)
- ・10月米ADP全国雇用者数(4日)
- ・10月米ISM非製造業景況指数(4日)
- ・BOE政策金利発表/議事録(5日)
- ・BOE四半期インフレレポート(5日)
- ・9月英鉱工業生産(6日)
- ・10月米雇用統計(6日)
- ・10月英雇用統計(11日)
- ・10月米小売売上高(13日)
- ・10月英消費者物価指数(17日)
- ・10月米消費者物価指数(17日)
- ・米FOMC議事録(18日)
- ・10月英小売売上高(19日)
- ・7-9月期米GDP・改定値(24日)
- ・7-9月期英GDP・改定値(27日)

11月の見通し

10月のポンド/ドル相場は、4カ月ぶりの月足陽線となった。米国の年内利上げに不透明感が生じる中で、ドルの上値が重かった事も影響したが、ポンドは米連邦公開市場委員会(FOMC)後も堅調を維持しており、英中銀(BOE)の利上げ観測によるポンド高の側面が強かったようだ。一部には、11月5日の英中銀(BOE)理事会で利上げ票が従来の1票から3票に増えるとの見方もある。BOEは利上げ開始を2016年半ばと見込んでいるが、5日の「スーパーサズデー(BOEが政策金利、議事録、四半期インフレレポートを同時に発表)」を経て市場の観測がこれより前倒しになるようだと、11月もポンド高が継続する可能性がある。ただ、米連邦公開市場委員会(FOMC)は、年内(12月)に利上げする可能性がある事を10月声明に明示しており、6日の10月雇用統計が良好なら利上げ観測の高まりとともにドルが強含む公算が大きい。ポンドとドルの「強さ比べ」は11月の第1週にヤマ場を迎える事になりそうだ。(神田)

(予想レンジ: 1.49500~1.58000ドル)